

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00483

研究課題名（和文）カミュ『手帖』の生成研究 自筆稿復元の完成による資料的価値の再構築

研究課題名（英文）A genetic study of Albert Camus's "Notebooks" - reconstruction of the value of the document by restoration of the original texts of the manuscripts

研究代表者

高塚 浩由樹（TAKATASUKA, Hiroyuki）

日本大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：90297771

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：カミュの『手帖』は、従来、事故死した作家が遺した客観的資料とみなされてきた。だが、彼は生前に、『手帖』を構成する9冊のノートのうち、第7ノートにまで修正を加えていた。今回の研究では、『手帖』第1～7ノートの自筆稿とタイプ原稿のすべてを調査し、自筆稿を復元する『手帖』の校訂版を作成するための情報を得た。

その過程で、カミュの妻フランシーヌが残した貴重な記録を発見し、彼女の証言によって、『手帖』の修正が行われたのは1954年であること、そして、出版された『手帖』の第7ノートにある『追放と王国』と『最初の間』のプランは、一部を除き、カミュが『手帖』の修正をした際にあとから挿入したものと判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、カミュの『手帖』は、事故死した作家が遺した客観的資料とみなされてきた。しかし、本研究は、カミュが生前に『手帖』に加えていた修正の詳細を明らかにし、それによって、出版された『手帖』の記述を「証拠」として論じられてきた彼の作品の成立過程の見直しを迫る。

たとえば、出版された『手帖』の記述に基づいて、『追放と王国』のプランは1952年に、そして『最初の間』のプランは1953年10月に固まったというのが「定説」とされてきた。しかし、どちらのプランもカミュが『手帖』の修正をした1954年に、後から挿入されたものと判明した。このように、本研究の成果は、カミュ研究における「常識」を一新するものである。

研究成果の概要（英文）：Albert Camus's nine notebooks were published only posthumously. On account of his sudden death, in a car crash in 1960, the notebooks were thought to be in their original state, and were long considered to provide an unvarnished view of his life and work. Yet in 1954, Camus had typescripts made of the first seven notebooks and revised these in the same year. I have examined the differences between the original manuscripts and the revised typescripts, in order to issue, in the near future, a critical edition of the notebooks. Such an edition should shed new light on the genesis of his work.

I have published a series of papers on the misunderstandings caused by Camus's revisions. In particular, I have emphasized the fact that in the published edition of the seventh notebook, plans for Exile and the Kingdom and The First Man appear for the years 1952 and 1953 respectively but not in the manuscript. Camus added these plans retrospectively to the notebook when he revised it in 1954.

研究分野：フランス文学

キーワード：カミュ 手帖 草稿研究 生成研究 最初の間 追放と王国 カルネ カイエ

1. 研究開始当初の背景

(1) 出版された『手帖』に事後的な修正が含まれている問題

1960年1月4日、アルベール・カミュは自動車事故で亡くなった。『手帖』は21歳の頃から死の直前に至るまでの、カミュの日記兼創作ノートである。彼の死後、1962～89年に3巻に分けて出版された『手帖』は、従来、研究者たちによって、作家の不慮の死によって遺された「客観的資料」とみなされ、カミュの伝記的な研究や、作品の生成のプロセスの研究では、何よりもまず『手帖』を参照し、『手帖』の記述を「証拠」とみなすことが、研究上の「常識」とされてきた。『手帖』を収録したプレイアッド版のカミュ新全集の出版（2006～08年）以降も、この「常識」に変わりはない。

しかし、3巻本の『手帖』にだけでなく、レーモン・ゲ＝クロジエによって再編集されて新全集に収録された『手帖』にも、重大な問題が存在する。いずれの版でも、本来の日記的なメモと、カミュが後から挿入したり修正を加えたりしたメモが、区別されることなく入り混じっているからである。

(2) 2019年度までの研究成果

カミュ新全集の『手帖』が、期待されていた校訂版からはほど遠い、3巻本とほぼ同じ内容で刊行されたことを知り、高塚は『手帖』に加えられた事後的修正に注目し、遺族から許可を得て、これまで行われたことのない『手帖』の本格的な草稿研究に着手し、既存の研究と従来の『手帖』の資料的な位置づけに異議を唱えてきた。そして、2014～19年度の2期にわたる科研費・基盤研究C（2014～16年度：「アルベール・カミュ『手帖』 - オリジナル原稿の復元と新しいカミュ像の探究」、2017～19年度：「アルベール・カミュ研究 - 『手帖』の修正から作品の創造へ」）によって、『手帖』の資料的価値の再検討につながる次の事柄を明らかにした。

9冊の「ノート」から成る『手帖』のうち、カミュがタイプ原稿を作成させ、そこに修正を加えていたのは、第1～7ノートである。そのうち、最も修正箇所が多いのは、作家としての誕生期にあたる第1ノートと、短編集『追放と王国』および自伝的小説『最初の人間』の構想に関するメモを含む第7ノートである。

カミュが『手帖』の再読と修正を行ったのは、『最初の人間』の具体的な着想を得た1953年10月以降であり、第7ノートの使用を終えた1954年夏から同年12月頃までと想像される。（ただし、『手帖』の修正を1954年に行ったというカミュ本人の証言は、まだ見つかっていない。）

カミュによる『手帖』の修正は、複数の研究者たちが指摘しているような、『手帖』の将来的な出版を期して行われた「推敲」とどまるものではない。それは、1954年当時に、部分的な執筆を行っていたにすぎなかった『追放と王国』と、まだ構想を開始したばかりで本格的な執筆には程遠い段階にあった『最初の人間』の、構想の進捗と執筆の開始を図った、カミュによる入念な準備作業であったと考えられる。

『手帖』の第1ノートと第7ノートの校訂版を作成する過程で明らかになったのは、第7ノートの特異性である。第1ノートと異なり、第7ノートでは、タイプ原稿に自筆稿にならないメモが少なからずタイプされており、しかも、タイプ原稿では、自筆稿にもともとあったメモにだけでなく、タイプ原稿で新たに加えてタイプされたメモにも、カミュが手書きで修正を加えている。自筆稿がなく、タイプ原稿で新たに登場し、しかも手書きの修正を加えられてもいるメモの大半は、1954年の時点で執筆中ないし構想中であった『追放と王国』と『最初の人間』に関するものであり、この事実は上記の ①の証左となる。

2. 研究の目的

- (1) これまで校訂版の作成を進めてきた第1・第7ノートだけでなく、第2～6ノートを含めて、カミュが修正を加える前の『手帖』第1～7ノートの復元を完成させ、『手帖』を研究者が依拠すべき「真の客観的資料」として蘇らせる。
- (2) 『手帖』の修正が1954年に行われたという「証拠」を見つける。そのため、カミュ本人の証言だけでなく、カミュ以外の第三者による証言や記録も参照して、『手帖』が修正された時期への言及を探す。
- (3) 『手帖』の再読と修正が、カミュが自分の芸術の集大成と位置づけるとともに、その新たな出発点とも考えていた『最初の人間』の執筆を期して行われたことを、『手帖』と『最初の人間』の原稿だけでなく、『最初の人間』の複数の創作ノートも参照して裏付ける。
- (4) 従来、不安定な時代が生んだ「不条理の作家」とみなされてきたカミュを、作家の自己探求と自己創造が自伝的作品の執筆を通じて行われてきた「フランス自伝文学の伝統」に属する作家として捉え直す。

3. 研究の方法

- (1) 『手帖』の原稿は、2020年にフランスのエクサンプロヴァンス市立メジャーヌ図書館から同市立ミッシェル・ヴォヴェル図書館に移された。コロナ禍が一段落した2022年8月以

- 降、半年ごとに計3回渡仏して、それぞれ約3週間フランスに滞在し、ミッシェル・ヴォヴェル図書館において『手帖』の自筆稿とタイプ原稿の調査・比較を行った。
- (2) ミッシェル・ヴォヴェル図書館には、カミュ本人による『手帖』の原稿だけでなく、『手帖』をめぐるカミュ以外の第三者による記録も保管されている。特に、3巻本の『手帖』の出版に関わったカミュの妻フランシーヌやカミュの友人たちが残した証言や資料を参照することにより、『手帖』が修正された時期が1954年であることの確証を求めるとともに、『手帖』第7ノートで「自筆稿にはないが、タイプ原稿にタイプされ、しかもカミュがタイプ原稿に手書きで修正を加えていたメモ」の由来について調査した。
- (3) カミュが1946年に行った北アメリカ旅行の際のメモと、1949年に行った南米旅行の際のメモは、『手帖』とは別に1978年に『旅行日誌』というタイトルで出版された。北米旅行の際のメモはもとも『手帖』第5ノート内の記録であり、また、南米旅行の際のメモは『手帖』とは別のノートに記されていたものだが、プレイアッド版のカミュ新全集では第6ノートに組み込む形で『手帖』内に位置づけられた。高塚はこれまでの調査でこの北米・南米の旅行時のメモを精査できないでいたが、今回、はじめて両方の旅行日誌の原稿を閲覧し、『手帖』の通常のメモとの比較を行うとともに、特に南米旅行の際の日誌の記述が、『追放と王国』に収録された、ブラジルを舞台にした短編小説『生い出ずる石』の描写にどのように活かされているかを調査した。
- (4) 『手帖』第7ノートで、タイプ原稿の作成時に新たに追加され、しかもカミュが手書きで修正を加えている『追放と王国』および『最初の人間』に関連するメモを精査するとともに、この2作品の原稿も閲覧して、「『手帖』の修正」・「作品の構想の進捗」・「原稿の執筆」という、3つのステップの間の連関性の立証に努めた。

4. 研究成果

- (1) 『手帖』の第1～7ノートに関して、自筆稿と、カミュが手書きで修正を加えた第1タイプ原稿、および出版のための清書原稿である第2タイプ原稿のすべてに目を通すことができ、修正が多い第1および第7ノートに関しては、校訂版作成のための情報の調査をほぼ終えることができた。残りの第2～6ノートは、第1・第7ノートと比べれば修正箇所が少なく、校訂版作成のための情報収集は、あと1～2年で終わられる見込みである。
- (2) カミュが『手帖』に修正を加えた時期に関する「証拠」として、次の2つのテキストを発見した。
- 3巻本の『手帖』のうち、第1・2巻の注釈者であったロジェ・キヨが、第1巻の出版直前に、『手帖』を出版したガリマール社の雑誌『新フランス評論(NRF)』の1962年1月号に寄稿したテキスト
- 『手帖』第1巻冒頭の「編集者のノート」の下書きとしてカミュの妻フランシーヌが残した原稿
- いずれも、カミュによる『手帖』の見直しが「1954年」に行われたことに言及している。(この成果に関しては、2023年12月16日の日本カミュ研究会例会における発表「アルベール・カミュ『手帖』の生成研究のために」で紹介した。)
- (3) 出版された『手帖』の第7ノートでは、『追放と王国』のプランが1952年のメモの中にあり、1953年10月の位置に『最初の人間』のプランがある。しかし、どちらも第7ノートの自筆稿には存在しない。この問題に関しては、フランシーヌ・カミュが残した記録に大きなヒントを発見した。フランシーヌは、1963年頃、『手帖』第2巻の出版のために、ロジェ・キヨとともに『手帖』の自筆稿とタイプ原稿の間の異同をチェックした際、詳細な記録を1冊の学習帳風のノートに残しており、その中に第7ノートの自筆稿に関する証言も記している。
- フランシーヌによれば、上記の2作品のプランに関するメモは、別紙に書かれて第7ノートの自筆稿に挿入されたものであり、自筆稿に存在する他のメモと一緒にタイプ化され、タイプ原稿でカミュが手書きの修正を加えたあと、修正後のバージョンが決定稿＝出版稿とされたのである。出版された『手帖』の第7ノートの中に上記の2つのプランが存在することに基づいて、従来、『追放と王国』の構想は「1952年」に、そして『最初の人間』の構想は「1953年10月」に固まっていたという見方が研究者たちの間で「定説」とされてきたし、プレイアッド版のカミュ新全集における『追放と王国』の解説および『最初の人間』の解説も、この「定説」を踏まえたものであった。しかし、実際にはどちらのプランも、カミュが『手帖』に修正を加えた「1954年」の時点のものと判明し、「定説」の誤りが証明されることとなった。(この成果の詳細は、2024年6月刊行予定の日本カミュ研究会の研究誌『カミュ研究』16号の掲載論文「Pour l'étude génétique des *Carnets* d'Albert Camus」にまとめる予定である。)
- (4) 『手帖』第8・第9ノートにはタイプ原稿がなく、カミュは生前、この2つのノートに修正を加えていない。しかし、第8ノートの自筆稿には欄外に「×」の印の付いたメモが多数あり、それらはほぼ全て、カミュがそのまま別紙に転記したり、部分的な修正を加えたうえで転記したりして、「『最初の人間』のための材料」というタイトルを付けた、自伝的小説を執筆するためのファイルに、『手帖』の他のノートから転記したメモとともに保存されていた。第8ノートで「×」が付けられてファイルに転記されたメモは、いずれも1956

年8月の直前までのものばかりであることから、カミュは1954年に『手帖』の第1～7ノートを再読・修正しただけでなく、1956年8月頃にもう一度『手帖』を（今度は第8ノートまで）再読し、来るべき『最初の人間』の執筆に備えていたことがわかった。（この成果に関しては、2021年12月5・6日に開催された第32回獨協インターナショナル・フォーラム「アルベール・カミュ：生きることへの愛」において口頭発表を行い、研究誌『カミュ研究』15号（日本カミュ研究会発行、2022年5月刊行）掲載の仏語論文« "Et il faut vivre, et créer" – sur le passage difficile au "cycle de l'amour" chez Albert Camus » に詳細を記した。）

- (5) 『手帖』の第5ノートにもともと記されていた北米の旅行日誌と、『手帖』とは別のノートに記されていたものの、プレイアッド版のカミュ新全集の『手帖』の第6ノート内に収録された南米の旅行日誌の原稿を閲覧して判明したのは、南米旅行日誌のタイプ原稿にカミュによる修正が数多く加えられていること、そして、カミュが修正を加えた部分の記述が、短編小説『生い出ずる石』の原稿で利用されているということである。もともとは日記的なメモであったテキストにカミュが修正を加え、それが小説内の描写で活用されるというステップは、『手帖』の再読・修正が自伝的小説『最初の人間』の構想の進捗と執筆につながっているという高塚の仮説と類似するものであり、＜南米日誌の自筆稿＞・＜タイプ原稿の修正＞・＜『生い出ずる石』の原稿の執筆＞の間の発展的なステップは、精査に値する。しかしながら、南米旅行日誌の原稿のうちエクサンプロヴァンスのミッシェル・ヴォヴェル図書館に保管されているのはタイプ原稿のみであり、自筆稿を閲覧することはできなかった。上記の発展的なステップの精査・確認は、今後の研究課題の一つである。

- (6) 一方、下記の3点に関しては、計画通りに研究を進捗させることができなかった。当初の計画では、4年にわたる研究期間に毎年2度渡仏して、『手帖』第1～7ノートの校訂版を完成させることを目指していた。しかしながら、2020年4月以降、コロナ禍の影響で約2年半にわたってフランスで原稿の調査を行うことができず、2022年8月以降の3度の現地調査で第1～7ノートのすべての原稿に一通り目を通すことができたとはいえ、校訂版の完成のために原稿を入念に再確認する必要は残った。

『最初の人間』の創作ノート（「『最初の人間』のための材料」、「黄色の手帖」および「青の手帖」）の内容に関する調査は、まだ途中の段階にある。それゆえ、＜『手帖』の修正＞・＜『最初の人間』の創作ノート＞・＜遺稿となった『最初の人間』の草稿＞という3者の間の関連性の立証には、まだ時間を要する。

1930年代の、作家カミュの最初期における自伝的小説の試み『ルイ・ランジャール』と、カミュが自分の家族と貧しい少年時代を語ったエッセイ集『裏と表』の原稿の調査は、カミュを「フランス自伝文学の伝統」の中に位置づけるためには必須である。しかし、今回の研究期間で閲覧できたのは『手帖』に直接関連する資料にとどまり、この2作品の原稿を閲覧することはできなかった。

上記の～の課題は、2024～2026年度の科研費・基盤研究C「アルベール・カミュ『最初の人間』 - その生成研究の再構築」(研究課題/領域番号: 24K03779)において、今回の研究を継続的・発展的に進めながら解決していく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高塚浩由樹	4. 巻 97巻11号
2. 論文標題 カミュの『手帖』を読む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす（白水社）	6. 最初と最後の頁 16, 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroyuki Takatsuka	4. 巻 15
2. 論文標題 "Et il faut vivre, et creer." sur le passage difficile au "cycle de l'amour" chez Albert Camus	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Etudes camusiennes	6. 最初と最後の頁 121-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57445/ecs.j.15.0_121	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高塚浩由樹	
2. 発表標題 「生きて、創造しなければならない」 アルベール・カミュにおける「愛の作品群」への困難な移行	
3. 学会等名 第32回獨協インターナショナル・フォーラム「アルベール・カミュ：生きることへの愛」（国際学会）	
4. 発表年 2021年	

1. 発表者名 高塚浩由樹	
2. 発表標題 作品創造のための『手帖』の修正 「第7ノート」第1タイプ原稿の考察	
3. 学会等名 日本カミュ研究会	
4. 発表年 2021年	

1．発表者名 高塚浩由樹
2．発表標題 アルペール・カミュ『手帖』の生成研究のために
3．学会等名 日本カミュ研究会
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<日本大学研究者情報システム> https://researcher-web.nihon-u.ac.jp/search/detail?systemId=d68fb3f49123b5c30a660360932725b740213a393450d865&lang=ja&st=researcher <researchmap> https://researchmap.jp/read0189885/
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------